

14 松河戸遺跡

松河戸土地区画整理事業に伴い 1996 年 1 月から 1998 年 11 月にかけて遺跡発掘調査が行われ、松河戸の人達も多数発掘に加わりました。

この遺跡からは、縄文時代の終わりから弥生時代前期と、鎌倉・室町時代の複合集落跡が発見されました。

稲作農耕が日本に伝わってきた段階での環濠集落も確認されており、ここに暮らしていた人々の遺物も多く出土しています。

そこからみえてきたのは、まさに、松河戸の里に住みつき、私たち現在に続く、縄文時代後期から弥生時代前期にかけての、先人たちの暮らしでした。

- (1) 遺跡発掘調査…………… p330
- (2) 環濠集落…………… p331
- (3) 遺跡からみえてくる人々の暮らし…………… p332
- (4) 出土品…………… p333
 - ① 土器、② 石器、③ 木製品、④ 祈り・まつりの道具



松河戸文化科学探求隊
 隊長 長谷川 浩
 080-3657-7052
 松河戸町の沿革ホームページ
<http://matsukawado.com/>

(1) 遺跡発掘調査

松河戸遺跡は、庄内川右岸の自然堤防上、標高 13～15m に立地する縄文時代から近世にかけての複合集落遺跡で、道風公園の北部一帯に整然と広がっていた水田地帯に所在する広大な遺跡です。

松河戸町一帯は、古代・中世に「安食荘」と呼ばれる天皇家に納めるコメを作っていたことが『醍醐寺文書』に記されていたので、研究者により、その存在は周知のものでした。

環状 2 号線工事に先立ち、道路建設予定地に沿って発掘調査が行われました。周辺には、西側に隣接する町田遺跡、勝川遺跡・古墳群、その西方約 1～1.5Km には、二子山古墳をはじめとする味美古墳群が存在します。さらに白鳳期には勝川廃寺が建立されるなど、この辺りは古代にあって庄内川流域の中核的な地域と考えられていました。

松河戸遺跡の中心は松河戸町北部の安賀地区(安賀公園)辺りで、区画整理事業に伴い 1996 年 1 月から 1998 年 11 月にかけて財団法人愛知県埋蔵文化財センターによる遺跡発掘調査が行われ、松河戸の人達も多数発掘に加わりました。

この遺跡からは、鎌倉・室町時代の水田遺構の下層には、縄文時代の終わりから弥生時代前期の複合集落跡が発見されました。

稲作農耕が日本に伝わってきた初期の段階の遺物であることが確認され、弥生時代の環濠集落は春日井市内では初めての発見でした。

そこからの出土品からは、弥生時代前期には稲作が盛んに行われていた様子が見られます。

松河戸町北部一帯に整然と広がっていた水田は、奈良時代に行われた「条里制」と呼ばれる計画的な水田開発に基づいた畦・水路を、今回の区画整理が行われるまで利用されてきました。



松河戸遺跡から西方向を望む 市教育委員会(平成 8 年撮影)



松河戸の人々による作業現場

奥に見えるのは環状 2 号線の松河戸インターで開通前



遺跡発掘調査に集まった人達 1996 年 8 月 9 日

奥に見えるのは開通前の環状 2 号線

(2) 環濠集落

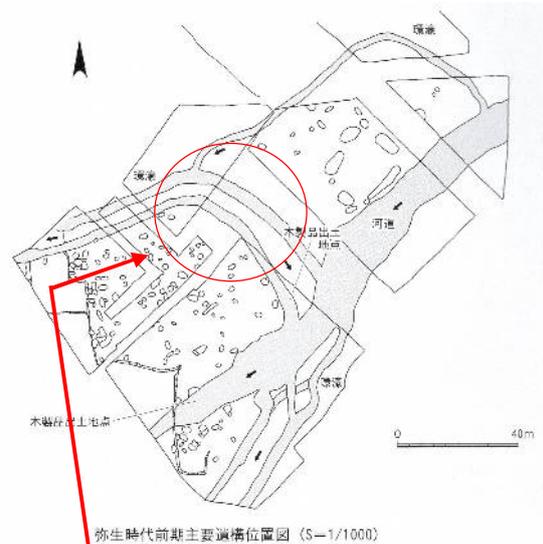
安賀公園の北部の標高 14m 前後の微高地（自然堤防上）に稲作農耕が日本に伝わってきた段階での「環濠集落」（南北 180m、東西 120m）が確認されており、稲作農耕に使われる「くわ」など米作りの木製の農具や土器などが多量に出土しています。そこからは、弥生時代前期（紀元前 2 世紀頃）ころ、稲作が盛んに行われていた様子がみられます。

環濠の内側からは多数の生活跡が確認され、弥生時代から始まる外来系の遠賀川系土器や縄文時代から継続する伝統様式の条痕紋系土器、石鏃、石斧などの石製品の他に弥生時代前期の遺跡としては尾張地方では初めての木製農機具や、祭りに使われたと思われる土製人形や土偶などが多数出土しています。

（庄内川上流の神領では銅鐸（市指定文化財）が発見されており、弥生時代のムラの祭器として使用されたといわれています。）

この弥生時代前期（紀元前 2 世紀ごろ）のムラは、微高地の北東から南西に流れる幅 12~18m ほどの自然流路を利用し、その兩岸に、環濠は集落を囲む状態ではなく 2 重と 1 重の溝を掘削しており、一端を河道に、もう一端を南西側の湿地帯に流入させています。

環濠といえば、「防御施設」をイメージさせますが、松河戸の環濠は、南側が開放上になっていることから、防御施設というよりは「水利施設」としての治水、水害対策を意図したものといわれています。



環濠完掘状況－1重と2重の環濠－



環濠掘削状況

(3) 遺跡からみえてくる人々の暮らし

松河戸遺跡からは、縄文後期から弥生前期の遺品が多数出土しており、その当時の様子を知る貴重な遺跡です。

縄文時代から当地に住んでいたと思われる突帯文土器(条痕紋系土器)を使用する集団は、この松河戸の地において、魚を捕り狩りをし、木の実を採り、また穀物の生産も行われていたと考えられ、そこには集落が営まれはじめたようです。



松河戸遺跡環濠集落のイメージ図

そこでは、「自然の恵み」が必要とされたことから、生産と豊穡のための「祈り」「まつり」が行われていました。

そこへ、新たに弥生時代からの移住者と思われる遠賀川(おんががわ)式土器を使用する集団が稲作文化をもって定着していったと考えられます。

またその一方で、この遺跡からは西日本からの影響ばかりでなく、東日本からの流入する遺物なども検出されています。

松河戸地区の弥生時代前期の人々は、木製農具を使い、「遠賀川系土器」を用い稲作をして生活を営んでいましたが、その後環濠の掘削を行って集落を区画し、弥生前期後半になると環濠を外に拡大していきます。

また、自然に宿る精霊や先祖の霊が日々の生活に大きく影響していると考えており、雨が降らないときに行く「雨乞い」、長雨のときに行く「日乞い」、害虫を追い払えるよう祈る「虫送り」、豊作に感謝して行く「秋祭り」など、現在までおこなわれていたような精霊や先祖の霊をまつる祭りが、すでに行われていたようです。【参照 p224 9 信仰、習俗 (1)ムラのお祭り】

松河戸遺跡の環濠は、「防御施設」というよりは「水利施設」としての役割が強く現れており、水害との闘いであったようで、すでに江戸時代の「松河戸絵図」に書かれているヨゲ提、霞提、喰違提などの工夫を彷彿とさせるものがあります。(P136の図)

松河戸遺跡からは、弥生時代後期から鎌倉時代になる前までの間の遺跡が発掘されていませんが、弥生時代前期に松河戸遺跡の終焉を迎え入れ替わるように西側 1.5km に位置する勝川遺跡が集落を形成しています。これは、庄内川の大洪水被害により、低地の松河戸遺跡から高地の勝川遺跡へと立地を変えた可能性が推測されています。

(4) 出土品

① 土器

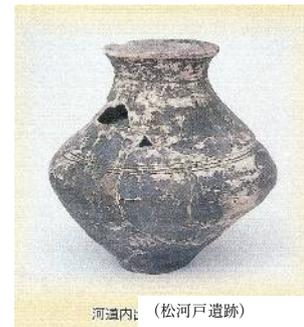
松河戸遺跡からは水田跡は確認されなかったものの、縄文時代の終わりごろの「突帯紋系土器」や、特に弥生時代前期の稲作文化の指標とされる「遠賀川系土器」の出土が多くみられました。

また、環濠の外からも多くの土器が出土しており、環濠の内側は古く、外へ行くほど「突帯紋系土器」から派生したと思われる「条痕紋系土器」が多くなり、「削痕系」や「沈線紋系」など「遠賀川系」以外の土器に多様化しています。

弥生時代前期後半になると、土器に他の系統の土器と折衷するものが現れます。

「条痕」と「削痕」、「遠賀川」と「条痕」など、両方の要素を持つ土器などが見られ、新しい系統の「遠賀川系」と在地の縄文的要素の強い「条痕紋系」が複雑に影響しあい、多系統の土器が共存していました。

形は「遠賀川系」であるが、伊勢湾西岸に主体をおき、独自の紋様をもつ「垂流遠賀川土器」や「突帯紋系」のケズリ調整を強く残す「削痕系土器」などがみられることに尾張地方の大きな特徴があり、そのすべてが出土する松河戸遺跡は、弥生時代前期のモデル的なムラといえます。



河内内 (松河戸遺跡)

このような土器からうかがえる松河戸のムラは、遠賀川系土器文化が広がり本格的な農耕文化が定着する段階になっても縄文以来の伝統的な文化が色濃く残る生活を営んでいたことを伝えてくれました。

松河戸遺跡は東濃地方との直接結び付きを思わせる遺物が認められたり、西日本的な様相を持つなど、東西の接点に相応しい内容を有しており、東西日本を繋ぐ要衝としての役割を果たしていました。

現在、松河戸遺跡は、埋め戻されて見ることはできませんが、松河戸遺跡出土の遠賀川系土器は、春日井に稲作をもたらした人々の生活の一端を教えてくれました。

(遠賀川式土器の様式を受け入れた前期弥生文化圏は尾張地方を東限とし、三河地方には及んでなかった。この地方が西日本と東日本の境界だった。弥生文化が三河以東に受け入れられたのは弥生時代の中期以降になった。)

○ ^{とつたいもんけいどき} 突帯紋系土器

突帯文土器とは、縄文晩期から弥生早期にかけて九州から東海地方東部までの広い範囲に成立した土器の名称で、口縁部や肩部に突帯（刻み目の入ったものが多い）と呼ばれる粘土の帯を貼り付けた特徴的な甕(かめ)のことです。

壺・鉢・^{たかつき}高坏など日常に使う土器を伴うことが多いので、これらのセットを突帯文土器様式と呼んでいます。



突帯紋系土器

(松河戸遺跡)

○ 遠賀川式土器^{おんががわしきどき}

九州から西日本に広く分布し、それが初期の水田稲作の西から東への伝播の指標とされ、西日本の弥生前期土器の総称としてつかわれるようになりました。

一般的に貯蔵用の壺(つぼ)と蓋(ふた)・煮炊き用の甕(かめ)と蓋(ふた)、盛りつけ用の鉢(はち)・高坏(たかつき)がセットとして使い分けられたとされ、縄文時代とは異なった特徴のある形が器に見られます。

時期や地域により違いはありますが、壺は頸と胴部などに模様をつけ、外面をへら状の工具などで磨き、丁寧に仕上げられます。甕は頸に模様をつけ、表面には板状の工具で刷毛目と呼ばれる細かい筋が残り、口の部分に刻みを入れるものや入れないものが見られます。

鉢は、甕と同じように表面を板状の工具で刷毛目と呼ばれる細かい筋を残すため、破片では甕と区別しづらいですが、頸にこぶのような突起をつけることや、火にかけた煤がついていないことが特徴です。



遠賀川系壺 (松河戸遺跡)



遠賀川系壺蓋 (松河戸遺跡)



遠賀川系壺 (松河戸遺跡)



遠賀川系鉢 (松河戸遺跡)



高杯脚部 (松河戸遺跡)

○ 条痕紋系土器^{じょうこんもんけいどき}

縄文時代の技術の色濃く残し、突帯紋系土器から派生したと考えられています。

土器の表面を貝殻や植物の茎を束ねたもので前面に模様をつけています。



条痕紋系壺 (松河戸遺跡)



条痕紋系鉢 (松河戸遺跡)

○ 削痕系土器

条痕紋系土器と同様に突帯紋系土器に系譜が求められる土器です。

特徴は、土器の表面にへらや板状の工具で荒く削った跡が残っており、表面を削る調整以外は遠賀川系と同じです。



削痕系壺 (松河戸遺跡)

○ 沈線紋系土器

弥生時代前期後半から中期前半にかけて、表面にへらなどの工具で沈線を描く特徴的な土器で、濃尾平野を中心に中部地方全域に分布がみられ、壺をはじめ多種多様の器形があります。



沈線紋系土器 (山手遺跡)

○ 亜流遠賀川系土器

従来、西日本の遠賀川系土器と共通点の多い「正統」に対し、伊勢湾独自の文様や焼成方法など在地性の強い土器を「亜流」と呼び、分けられています。



亜流遠賀川系壺（山中道範）

② 石器

石器は、鉄が普及するまで人々の道具として重要な役割を果たしました。

獲物を捕る狩猟・漁猟具として、獲物を解体したり木の実を割る調理具、また木を切り倒し加工するなど様々な利用法がありました。

松河戸遺跡では、縄文系石器が大量に出土しており特に石鏃は400点以上出土しています。

また、稲穂を刈り取る石包丁や、木の伐採や加工などに使われた磨製石斧が出土しています。

土器は稲作文化の到来により大きくかたちを変えますが、石器は打製石器から磨製石器とかわるものの鉄器が普及するまで従来の形態をとります。

○ 弥生系石器（磨製石器）

(松河戸遺跡)



土坑内出土石包丁



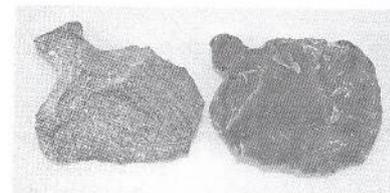
磨製石斧

○ 縄文系石器（打製石器）

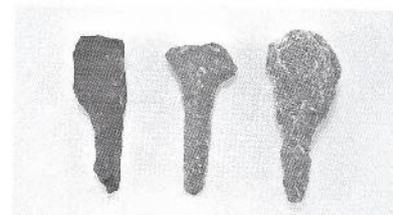
(松河戸遺跡)



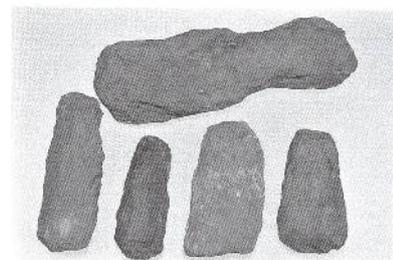
打製石鏃



石匙（切る・削る道具）



石錐（穴をあける道具）



打製石斧（土を掘る道具）

③ 木製品

木製品は、土器などと違って、埋まっていた環境により残り具合が大きく左右されますが、松河戸遺跡からは、弥生時代前期中頃の木製品が河道と環濠から多量に出土しています。



河道内の木製品出土状況
槽(そう)と広鍬(ひろくわ)



河道内の木製品出土状況
鋤(すき)とかんがえられますが、パドル状の櫂(かい)の可能性もある。

稲作に使われた農具や木を加工する斧や、獲物を捕らえる狩猟具、穀物を蓄える木製容器・木製編かごなどが出土しています。

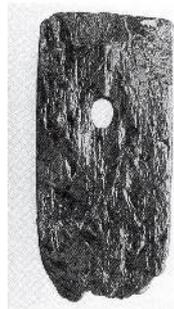
弥生前期の木製品の出土は、愛知県では松河戸遺跡のみです。



○ 農具

農具としては、土の反転や掘削などに用いられた鍬(くわ)、鋤(すき)、土をならす柄振(えぶり)、収穫具としての包丁(ほうちょう)、鎌(かま)、田仕事に使う田下駄(たげた)、脱穀具の杵(きね)などが、松河戸遺跡から出土しています。

周辺の弥生・古墳時代集落



広くわ

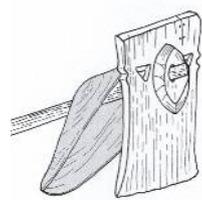


狭くわ

鍬(くわ)は、身と柄から成り、刃幅の広いものと狭いもので、用途別に使い分けていたと考えられています。
また、柄をさす穴の周辺は、補強のため舟形や円形をした突起があります。
また、泥よけは、現代では見られませんが、水田で土をくたく時、泥をかぶらないよう鍬に装着されたと考えられます。



泥よけ

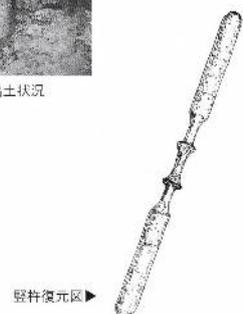


泥よけ装着の想定図



竪杵出土状況

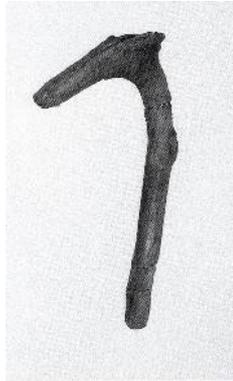
竪杵(たてぎね)は脱穀具で、先端を打ちつけ、おしつぶす道具です。弥生時代から現代まで、ほとんど形や使い方が変わらず残った農具です。
出土の竪杵は、細くなった中央の握り部分で折れています。全体の長さは約 120 センチほどで、セットとなる臼は出土していません。



竪杵復元区

○ 工具

斧(おの)は、縄文時代から古墳時代を通じて、木を倒す・割る・切る・えぐる・けずるなどさまざまな万能工具としてつかわれました。



膝柄

膝柄
(松河戸遺跡)

頭部が屈曲して斧をくくりつける。
柱状石斧などを「手斧」のように加工用として使われた。



直柄頭部



直柄石斧装着想定図

直柄
(松河戸遺跡)

まっすぐな棍棒状の頭部に孔をあけ、石をはめ込む。
両刃の石斧と組み合わせて伐採用として使われました。

○ 容器

木製の容器は土製に比べて軽くて壊れにくい利点があり、工具の進歩に合わせて多様になり、使用頻度は上がったと考えられます。

槽(そう)・盤(ばん)・高坏(たかつき)・椀(わん)やひょうたんの果皮を利用した容器・編みかごなども、松河戸遺跡から出土しています。

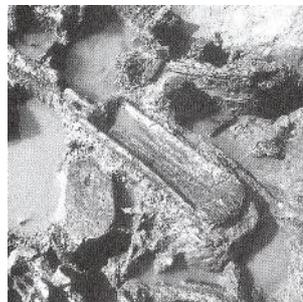


編みかご

10点程出土しています



文様の描かれたひょうたん製の容器の一部
—文様は焼きゴテで描かれたと推定される—

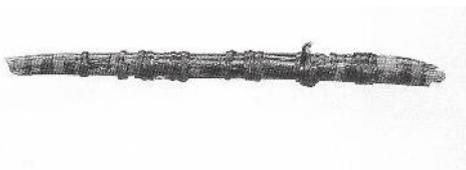


槽出土状況—左は広くわ—

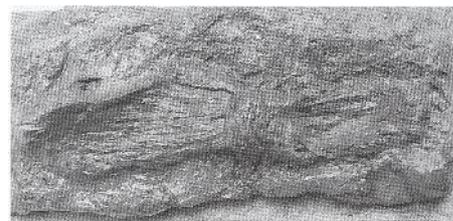
○ その他

狩猟具の矢と弓が出土しており、矢柄などの出土例は非常に少ないようです。

河道のなかから、かご材やワラのような植物を束にしたものも、松河戸遺跡から数点確認されました。



先端が欠損していますが、弓の一部と考えられ、表面には漆が塗られています。



イネ科植物出土状況

④ 祈り・まつりの道具

縄文、弥生時代ともに「自然の恵み」が必要とされ、特に弥生時代になると生活の基盤となる稲作農耕が盛んに行われてきたことから、生産と豊穡のための祈りまつりが発達してきました。

このような精神文化をあらわすものとして、「祈り」や「まつり」の道具は、土器・石器などの生活道具と区別して「第二の道具」と呼ばれています。

松河戸遺跡では、縄文時代の晩期から弥生前期の土偶や石棒、土製人形などが環濠と河道内から出土しています。

出土土偶は大小確認されていますが、いずれも肩から上が欠損していました。

全国的にみても土偶が破損された状態で出土することから、祭祀で土偶を壊して病気や怪我の治療などを願い、新しい生命の再生を願ったと考えられています。

松河戸遺跡からの土偶と土製人形の出土にみられるように、祈りやまつりの道具に縄文的要素と弥生的要素が共存することは、土器などの生活用具が変化するだけでなく縄文と弥生が融合した姿とも考えられます。

自然に宿る精霊や先祖の霊が、人々の日々の生活に大きく影響していると考えており、雨が降らないときに行う「雨乞い」、長雨のときに行う「日乞い」、害虫を追い払えるよう祈る「虫送り」、豊作に感謝して行う「秋祭り」など、現在までおこなわれていたような精霊や先祖の霊をまつる祭りがすでに行われていたようです。

【参照 p224 9 信仰、習俗 (1)ムラのお祭り】



石棒 (松河戸遺跡)



土偶 (松河戸遺跡)



土製人形(松河戸遺跡)

環濠内より検出され、全長（残存部）61 ミリ、幅 34 ミリ、厚さ 8 ミリ（幅、厚さとも最大部）で両足は欠損しているものの全身を表現しており、右腕は肩からやや下がり気味に伸び、左腕を腰にあてた姿勢がうかがえます。

首の部分には、首飾りを表現したと思われる細かい刻みと左肩から胸にかけて襷（たすき）掛けした痕跡がみられます。

写実的であるという点で明らかに「縄文土偶」とは異なる系譜のもので、伝統様式と外来様式の錯綜する尾張地方での精神世界や生活を考えるうえで大変貴重な資料といえます。

平成 13 年度企画展 松河戸遺跡展 春日井市・市教育委員会 から抜粋し、編集してあります。

松河戸文化科学探求隊

隊長 長谷川 浩

080-3657-7052

松河戸町の沿革ホームページ

<http://matsukawado.com/>